

## 思春期の問題行動に対する青年期のとらえ直し (5)

—思春期と青年期における父親との体験の異同と思春期に対する見方の変化—

鹿 嶋 達 哉

(広島国際大学心理科学部教職教室)

【要旨】青年期における思春期のとらえ直しに関する研究の一環として、大学生の思春期と青年期における父親との体験を授業後の感想から明らかにした。思春期において父は「特別な存在から一人の人間」として見られ始め、「見守りながら相談に乗り叱責をする存在」となった。へだたりも感じ始め、嫌悪感や対立も生じるようになった。青年期になると父は尊敬され、類似性が記されるようになる。見守り助言することは変わらないが、一人の人間としてより見られるようになり、中年期の変化や祖父母との関係が記されるとともに、批判の対象ともなっていた。思春期における父との体験は青年期に転機、意味づけ、関連づけ、変容によりとらえ直されていた。

思春期における悪との接触は後の発達に悪影響を及ぼすのみならず、次のような取り組むべき課題を残す。a) つらい体験をした自分、適切な対処が充分に取れなかった自己の受容、b) 問題行動の当事者や傍観者となった生徒を含む友人との関係の再構成、c) 適切な対処をしなかった大人に対する信頼感の回復、d) 問題行動の土壌となり、解決できない社会の受容とそこにおける自己の定位。この課題が未解決のままでは、大人として社会に参加することが困難になり、「育てられる者」から「育てる者」への移行(鯨岡,2002)にも支障をきたすと考えられる。青年期は大人になる準備段階でもあるとともに、思春期までの自分とある程度距離を保ちながら振り返る時期でもある。その一つの契機として大学の授業が考えられる。鹿嶋(2010a)は大学における「青年心理学」の授業が、「青年(学生)―大人(教員)の世代循環の場」として機能していることを示した。さらに、一連の研究によりいじめ(鹿嶋,2010b)、不登校(鹿嶋,2013)、教師(鹿嶋,2014)、学び(鹿嶋,2015)に対するとらえ直しの様相が明らかにされた。

本研究では父親を取り上げる。父親は思春期における葛藤・対立の対象であると同時に、最大の支援者の一人ともなりうる両義的な存在である。また、悪との接触の契機にも歯止めにもなりうる。

父親の役割は次の6つに整理される。1) 母親と同じように世話したりあやしたりする養育者。2) 母親とは異なる遊びや情動喚起をする養育者。3) 母親の育児を認めたり少し距離を置いて助言したりする母親の支持者。4) 父―母―子の三角関係の一項。5) 母子の癒着を引き離す役。6) 家庭外の基準を導入する社会の代表、社会化の担い手。

親子関係は子どもの発達段階により変化する。White, Speiman & Cotons (1983)は青年期から成人初期を対象としたインタビューから、親子関係を次のように段階づけた。①両親からの分離を強調し、自分が正しいと主張する「個性化の段階」。②親子関係には自分も関与していることに気づく「関係の視点が加わる段階」。③両親の立場に目をおき、両親の目で見える能力を持つ「両親の視点が加わる段階」。④両親が自分を一人の個人として眺めるイメージがもてる「相互的視点が加わる段階」。

⑤互いに個別の人間とみなす「相互性の始まり」。また、小学生から成人にいたる親子関係の変化を特に心理的離乳に焦点を当て整理した落合・佐藤(1996)によると、中学生の父親では「子を抱え込む関係」と「子と手を切る関係」が併存しているが、高校生で転換期を迎え親子関係は多様になり、大学生になると「子が親から信頼・承認されている関係」、その後(大学院生時)に「親が子を頼りにする関係」へと変化する。反抗期の中学生になるとは父親の権威や強いイメージは低く評価され、物理的・心理的距離を広く感じるようになる(松平・三浦,2006;松井,2001)。大学生になると「職業人」「家計の担い手」としての評価は高くなるが(登張・本田・保坂,2007)、人生観(人生の目標や指針)を与える存在としてはとらえられていない(猪野・堀江,1994)。ただし、自立過程には性差があり(福島,1993)、男子はまず親から分離して親と自分は異なる存在であることが意識されるのに対して、女子は大学生ぐらいになると親からの独立の意識は高くなるが、同時に親との和解・信頼関係が確立されていく。

子どもの発達において、父親と母親は(一部)異なる役割・機能を有すると考えられてきた。河合(1995)は父性原理と母性原理の違いを表1のように対比させ、父性の機能を「切る」とし、目標を個の確立・成長におき、個人差と個人の責任を重視し、契約に基づく言語的コミュニケーションを父性による特徴としている。また、長としての役割は指導にある。一方、Parsons&Bales(1955)は伝統的な家族における母親の機能を表出的、父親の機能を道具的とした。従来の理論は父性の特色を「厳格さ、権威」としているが、現代の父性は「協調性、民主的なかわり」を特色とし(尾形,2010)、父性には両側面があると考えられる。Schulman & Seiffge-Krenke(1997)によると母親に比べ父親は、子どもと距離を保ち、自己開示や相談を受けることが少ない。しかし、勉強や将来については話し相手になり、必要などときにはそばにいて自己実現を助けることが求められる。平田(2003)によると父親には情緒的なかわりだけでなく、ルールを守らせたり社会の規範を教えたりする役割も必要である。

父子関係は子どもの適応に影響がある。例えば、父親の共行動的・道具的・情緒的サポートが多いほど子どもの自己肯定感が高い(細田・田嶋,2009)。父親は母親を介しても子どもの発達に影響する。平山(2001)は中学生の適応は父親自身の評定よりも母親が評定した父親の家庭への関わりの評定の方が関連性の強いことを示した。Flouri & Buchanan(2003)は大規模な縦断的研究から16歳時の父親の関わりの高さが33歳時の精神的健康(不安の低さ等)と関連したことを見出し、影響力が永続することを示した。

本研究では大学の教職課程における青年心理学系(一部生徒指導論系)の講義で毎回授業後に学生が提出した感想の中から、父親(及び一部比較のために「親」「母親」)に関して記述したものを分析の対象とした。それにより思春期と青年期における父親の関わりやイメージ、役割、および現時点(青年期)からの思春期のとらえ直しの様相を検討することを目的とした。

表1 父性原理と母性原理の対比(河合,1995)

	機能	目標	人間観	人間関係	コミュニケーション	責任	長
父性原理	切る	個の確立・成長	個人差	契約	言語的	個人	指導
母性原理	包む	場の維持・場への所属	平等	一体感	非言語的	場	調整

## 方法

調査対象者：国立（現国立大学法人）Z大学の自然科学系学部（複数）において2003年～2010年度教職課程における青年心理学系の講義（一部生徒指導、2006S,2007S）の受講生（表2）。

データ：「学び」をテーマにした授業の終了時に学生が記述した感想を、次回の授業で配布するために教員がまとめた113の文を分析の対象とした。

表2 調査対象者の年度別履修者数と感想数

開講年度	2003	2004	2005	2006	2006S	2007	2007S	2008	2009	2010	計
受講者数	108	108	107	105	57	123	78	88	88	96	958
感想数	8	23	16	9	3	13	5	9	15	12	113
(親・母)	26	17	13	19	8	18	13	6	13	18	151

## 結果

学生の記述を次のように分類した。なお、下表の(3-8)は表1の2003年度第8回の講義を示す。また、Sは生徒指導系の講義、[以前]は思春期以前の体験を示す。

### I 思春期における父親との体験

#### <父との関係の変化>

思春期になると身体的、体力的に父親を超えるようになるが、それは「悲しい複雑な気持ち」【1】や「父親の言うことをきく」行動【2】をもたらした。

#### <父への好意・信頼>

思春期以前の父は、自分の存在に対する喜び【3,4】や安心を感じさせる存在【5】であり、遊び相手【6】、最強の人物【7】でもあった。思春期以降でも嫌われることもなく【8,9】、落ち着きを与え【10】、家事をする父親もいた【11】。

#### <見守る父>

子どもの意志を尊重して見守る父親もいたが【12~14】、突き放された態度と受け取られることもあった【15】。また、自分のことを思っている、大切にしていることに気づいた学生もいた。【16~18】。

#### <先達としての父>

思春期以前には家庭の方針を定めたり【19】、教訓を垂れたりした【20】が、思春期になると背中を見せ【21】、助言【22】や相談【23,24】をすることにより子どもに影響を及ぼしていた。また、勉強や進学を気にしたり【25】怒ってせかしたり【26】する父親もいた。

#### <人間としての父>

父親を人間として感じると思春期以前にはショックを受ける【27】が、思春期では「一人の人間」【28】「普通の人間」【29】と感じるようになった。

#### 【思春期】

##### <父との関係の変化>

【1】 父親より背が大きくなったとき、少し嬉しく、少し悲しい複雑な気持ちになった。(44)

- 【2】 父子げんかですべて初めて父親に勝った。それ以来、父親の言うことをさくようになった。(7-5)
- <父への好意・信頼>
- 【3】 以前 私の父は「自分の子どもが生まれたときに、もうこれですべて死んでもいいと思った」とよく言っていた。(5-8)
- 【4】 以前 父は私(女性)が生まれたときに、「よかった。戦争にとられることがない」と言っていた。(7-8)
- 【5】 以前 幼い頃、遊ぶときや勉強するとき、母や父がいる場所、見るところだと落ち着いた。(9-3)
- 【6】 以前 動き回って遊ぶとき(じゃれたり、とんだりばかり)は父と遊んでいた。(4-3)
- 【7】 以前 幼い頃に父親の記憶はあまりないが、自分のなかで最強の人物だったことはたしかだ。(4-3)
- 【8】 父親を嫌いになったことはない。(3-4)
- 【9】 父親を嫌だとか気持ち悪いと思ったことがない(女性)。(4-3)
- 【10】 病気のときは父のベッドで寝かされたが、父のそばで落ち着いた気がする。(4-3)
- 【11】 父が料理人でいつも父が食事を作っていた。料理は父親が作るものだと思っていた。(10-5)
- <見守る父>
- 【12】 父は家業を継ぐだけじゃなく、私にはやりたいことをやらせてあげたいと言う。(6-8)
- 【13】 進学するとき、母は「ここへ行け」と言っていたが、父は自分で考えて行きたい所へ行けと言っていた。(8-13)
- 【14】 中高と月に1週間お泊りしていた。行かぬ方が多いと半断しての欠席で、親も見守ってくれていた。父と遊びに行ったり母と料理をしたりしていた。大学生になった途端、学校大好きになった。(6S-5)
- 【15】 中学生になったとき、急に父が突き放したような態度をとるようになり、不安になった。今考えるとそれが自分の自立を助けていると思う。(7-13)
- 【16】 高校生になると、父を一人の人間として見て、面白い考え方もするし、私のことを思っていることがわかってきた。(7S-3)
- 【17】 中高のときは母がいつも話をきいてくれた。高校のとき、父が子どもたちのことを大切に思っていることがわかった。説教よりも、大切に思っていることを行動や言葉で伝えることが大切だと思う。(7-7)
- 【18】 父を正直めんどくさいと思っていた時期があった。しかし、一緒に車に乗っていると急ブレーキを踏んだ父がすかさず左手で私をかばっていた。そのとき父に守られていると思った。(10-7)
- <先達としての父>
- 【19】 以前 家事類を一切させてもらえなかった。父が「子どもに家事をさせるな」と言っていた。(9-5)
- 【20】 以前 小学校の頃、他人と比べてばかりいたら、父が「自分のライバルは自分自身だ」と教えてくれた。(3-7)
- 【21】 父の背中を見て、専門分野で魅力を感じ、尊敬できる先生に出会い、教師を目指すようになった。(4-7)
- 【22】 進路選択のとき「高卒でもかまわない」と話したら、父に高卒の苦労を話され、絶対に大学卒業しろと言われた。(4-11)
- 【23】 普段はあまり父と話をしないが、進学を決めるときには毎日のように真剣に話し合った。父親の経験などを話してくれ、父親が自分よりも深い考えを持っていることに気づき、尊敬するようになった。(6-13)
- 【24】 父とは仕事の話をしたことがない。進路について真剣に相談したことがある。(9-8)
- 【25】 父は勉強や進学ことにも気がしたが、母は全く気にせず好きにさせてくれたので、反発することも少なかった。(7-6)
- 【26】 優柔不断していると、父は自分で決めろと怒ってせかすが、母と一緒に悩んでくれる半面、「これこそ」と勝手に決める。(8-13)
- <人間としての父>
- 【27】 以前 小4のとき、理不尽なことで父親に怒られた。そのとき父親も人間だと思った。軽蔑はしなかったが、ショックは大きかった。その後、自分で判断するようになった。(3-3)
- 【28】 あるとき父の悩みをきいて「父も人間なんだ。短所もあれば、長所もあるんだ」と気づき、それから父を一人の人間として見るようになった。(5-6)
- 【29】 父が母に叱られたり、母が逆ギレしたりしているところを見て、親も普通の人間だと感じた。(7-13)

<父への距離感>

思春期以前から父親との接触が少ない学生もいた【30】、思春期になると「よそよそしい」【31】、

「おねだりできない」【32】ようになり、一緒に登下校するのを避けるようになった【33,34】。また、女子は「女であることを悟られたくない」【35】、「どう思っているか…聞きたくない」【36】と感じていた。また、両義的な競争意識【37】や反抗心【38】を持つものもいた。

#### <父からの否定・叱責>

厳しく叱る父親も記されていた【39~42】が、一部は肯定的に受けとめられていた【41,42】。

#### <父への嫌悪>

父親に対する嫌悪感は思春期以前にも【43】思春期にも【44,45】みられた。また、その影響を考えたり【46】悩んだりする【47】ことも記されていた。

#### <父との対立>

思春期には父に反抗したり【48】、言い争ったり【49】する学生が多い。また、その対立は単にイライラによるもの【48】から自立のためのもの【50】までみられた。さらにその対立は信頼感を背後にしたものとも考えるものもいた。

#### <「切る」父>

父の存在を母親への甘えを切り離すものとしてとらえていた学生【52】もいた。

#### <母を支える父>

直接子どもに関わるだけでなく、母にアドバイスしたり【53】、母をコントロールしたり【54】、母子の仲介をしたり【55】して間接的にもかかわっていた。また、父母の連携が感じ取られていた【56】。

#### <父への距離感>

【30】 以前父が会社から帰宅するのは11時すぎがあたりまえだった。会社が5時に終わることを知らなかった。(5-3)

【31】 父は兄弟3人を呼ぶとき「君たち」と呼んでいた。大学に入ってからよそよそしい気がした。(10-5)

【32】 母は「あれ買った」と言えるが、父はおねだりができなかった。(4-3)

【33】 学校の帰りに偶然父と出くわした。しかし、並んで二人で帰るのを拒んだ。(8-7)

【34】 小学生の頃は父と同じ車両に乗っていた。中学入学と同時に違う車両に変えた。(10-7)

【35】 娘が父に男ことばを使う気持ちがよくわかる。父は父は、自分が女であることを悟られたくない。(4-11)

【36】 父親が娘のことをどう思っているのかとても気になるが、実際聞きたくないものだ。(4-11)

【37】 最初から父親は勝てないと思って努力してはいるが、他人は感じない競争意識を父親は持つということは、エディプス・コンプレックスかとわからなくなった。(5-3)

【38】 父はとても好きだが、反抗すると本気で見限られそうに反抗できなかった。反抗されるような人間ではなかったことも大きい。(4-6)

#### <父からの否定・叱責>

【39】 父や母が怒っているときには別人に見えた。(7-1)

【40】 子どものとき、悪いことをすると父にすごく怒られて山に置き去りにされた。そんなとき母が必ず迎えに来ていた。(8-13)

【41】 普段母がやかましく怒る。しかし、何か大変なことが起こると父がケンコツ付で叱ってくれる。(8-13)

【42】 子どもの頃、一度は父親の財布から500円とった。父親にこっぴどく怒鳴られた。そのときに、ものごとの善悪を初めて理解できたんだと思った。(9-13)

#### <父への嫌悪>

【43】 以前小学校5,6年生の頃から父親に嫌われて、接触をできる限り避けていた。(7-3)

- 【44】父がとても厳しく、嫌いだった。(5-6)  
【45】男ながら、父親の直ばしは嫌いだった。(3-4)  
【46】父親のような人と結婚したいと思ったことがないが、このような嫌悪感や恋愛感情に影響するか？(4-3)  
【47】父親というのは子どもから嫌われるしかないのかと悩むことがある。(8-13)
- <父との対立>  
【48】反抗期のときは母こそんなこライラしていたかわからないほど父親に対して反抗していた。(10-7)  
【49】親父と常に言い争っていた。朝一からだったので一日中気分が悪く、学校でも腹が立っていた。(9-6)  
【50】進路で反対した父に「父さんのためではなく自分のために進路を選ばせてくれ」と言った。(8-9)  
【51】父とけんかして無視していると、母が「お父さんがおかしいそうでしょ」と言ってきたので、話していた。父はは何を言ってもしても大丈夫だという気持ちがあったから、そんな態度で接していたと思う。(9-6)
- <「切る」父>  
【52】振り返ると、たしかに母親に甘えている自分を父は切り離そうとしてくれた。(4-3)
- <母を支える父>  
【53】おじではなく、父が第三者的な視点で見ている、母にアドバイスをしていた。(4-5)  
【54】母が子育てでストレスがたまったときは、父がうまくコントロールしてくれたそうだ。(4-3)  
【55】母に「仕事と子どもとどっちが大切なの？」ときいたことがある。あとで父から母が泣いていたと聞いた。自分を育てるために働いてくれているのに、よくないことをきいたと思った。(9-14)  
【56】母親がやさしいときにはやさしいし、怒るときには口より先に手が出る怖親であった。父親は普段は母親に支配されている気がするが、母親で解決できないときには必ず出てきて怒る。二人とも怒っているばかりではなく、一人が怒ればもう一人がなぐさめてくれるということが多々ある。(3-9)

## Ⅱ 思春期以降（青年期）における父親との体験

### <父への尊敬>

思春期になっても父親とくっついていたり【57】、「かつこいい、かわいい、天然」と見直したりする【58】女子がいた。また、仕事【59】や家事【60,61】をする父を肯定的に評価し、いないと（弟が）寂しいと感じた【62】。

### <父への尊敬>

家での送迎【63,64】や食事時【65】に父への敬意を表する学生、仕事に対する敬意【66~68】を表する学生がいた。また、その尊敬を父に伝えたもの【69】もいた。

### <見守る父>

「いずれ出ていく」「責任は自分でとる」「やってみる（チャレンジ精神）」を学生（女子）に求める父がいた【70~72】。

### <先達としての父>

父は「家族を守る」大変さ【73】や仕事の大変さ【74,75】を子どもに伝えていた。また、「日頃は何も言わないが何かあったときに核心をつく意見を言う」父もいた。

### <人間としての父>

父の「よくふざける」【77】、「若い頃はヤンキーだった」【78】、「口数がやたら多い」【79】ところにといわゆる「父親らしさ」とくい違う人間性を感じていた。

### <父の（中年期）変化>

父の中年期の変化として、仕事以外の趣味（手品や農業、「いろいろなこと」）【80~82】に打ち込む、家事をするようになる【83,84】、家族（特に妻=母）とのふれあいの増加【85~88】を認

めている。

<祖父母との関係>

祖父母との関係についても記されるようになる【89～92】。特に、父の涙は印象に残るできごととしてあげられている【90,92】。

<父のように>

父との類似性を現在感じるもの【93～95】、子どもの頃は父のようになりたかったが今は別の道を歩むもの【96,97】、昔は父のようになりたくなかったのに今は理想像となっているもの【98】、小さい頃は継ぎたい、思春期は絶対イヤ、最近は跡をついでもいいと変化しているもの【99】がいた。また、「父と違った大人になりたい」【100】、「(似ていると言われると) いい気がしない」【101】、「反対の性格になった」【102】とする学生もいた。

【思春期以降 (青年期)】

<父への好意・信頼>

- 【57】 TVを居間で寝転がりながら見る。私 (女性) と姉の間で父が入り、くっついて寝ている。(5-3)
- 【58】 今まで怖いと思っていた父を、他の家よりもかっこいい、かわい、天然と思うようになった。(7-5)
- 【59】 父は仕事のグチをこぼすこともなく、毎日仕事を楽しんでいる。(6S-13)
- 【60】 休日は父が夕食の準備をする。(7-3)
- 【61】 父が家事をするのはあたりまえ。友だちに「いよお父さんだね」と言われて、少し見直した。(6-5)
- 【62】 父が単身赴任をしている。中学生の弟は父がいないことを寂しいと言う。(9-13)

<父への尊敬>

- 【63】 父親が仕事から帰ってくると、家族全員で出迎えをする。(6-5)
- 【64】 朝食を家族と一緒に食べ、父親が出勤するときには外に出て見送る。(6-5)
- 【65】 父の前は横切らない。父は冷ごはんを出さない。(7-3)
- 【66】 このGWにパソコンの使い方を教えるために、父の職場 (公務員) に生まれて初めて行った。父の職場を知ると同時に、父への感謝の気持ちをあらためて感じた。(9-4)
- 【67】 父の仕事ぶりを見たことはないが、母から「がんばって仕事をしている」ときくので、尊敬している。(5-12)
- 【68】 父は職人で、ふだんただのわがままだが、仕事となるとごたごたに変わる。伝統を守ることに常に苦心し、ときにイライラして母にあたることもある。幼い頃はそんな父を変人だと思ったが、今は父が誇りを持って仕事をしていると思うし、尊敬もしている。(6S-13)
- 【69】 実家へ帰ったとき、父を尊敬していると言ったら、普段あまり見ないような顔で喜んでくれた。(9-8)

<見守る父>

- 【70】 母は私 (娘) に家こひてほしいようだが、父は娘をいざれ出て行く人間だし、そうできないといかないと言う。(4-11)
- 【71】 父は「好きなことをさせてやるけど、責任は自分でとれ」と言われていた。母は何かにつけ、ああしろ、こうしろと言う。(5-12)
- 【72】 父は「やってみればいじやないか」というチャレンジ精神が強く、母は子どもの安全を願う気持ちが強い。(5-12)

<先達としての父>

- 【73】 「学生も大変だ」とほめていたら、父に「大人になったら自分だけではなく、家族も守らないといけなくなる」と言われた。(6-8)
- 【74】 父は祖父に反対され、自分のなりたいた職業に就けなかった。父の仕事を継ぐというと「自営業は大変だからやめとけ」と反対される。(5-7)
- 【75】 父と同じ会社で就職したいと言うと、父に「絶対そうならない方がよい」と言われた。今考えれば、もっと自分らしく人生を送れたと言いたかったのかなと思う。(5-7)
- 【76】 母は常にうるさいが一番近くにいる。父は日頃何も言わないが、何かあったときには核心をつく意見を言ってくれる。(7S-11)

<人間としての父>

- 【77】父は家ではよくふざける。父は会社ではとても真面目なので、バランスをとっていたのかなと感じた。(8-10)
- 【78】今はすごくまじめな親父が、若い頃はヤンキーだったことを知って驚いた。(4-8)
- 【79】私の家では、母は怒ると無口になるし、父は口数が決たら多い。(5-14)

<父の(中年期)変化>

- 【80】父はとてもまじめで何か楽しみかな?と思っていた。そんな父が突然、趣味として手品を始めた。父は楽しそう  
で、まだまだ手際の良くない手品を嬉しそうに見せてくれると、私もとても嬉しくなる。(5-8)
- 【81】仕事一筋だった父が、50歳ごろから農業を始めた。(5-8)
- 【82】父は2年前に病気をして以来、時間をより大切に、いろいろなことをするようにになった。(7-8)
- 【83】父は以前は仕事ばかりしていたが、最近では夕飯を作ったり、家事をしたりするようになった。昨日は父がシチュー  
を作ってくれたが、野菜の大きさのことで母と少しもめていた。(5-8)
- 【84】父は最近自分から家事を手伝うようになり、母は仕事を始めた。(10-11)
- 【85】仕事ばかりだった父が、母と二人で買物に行ったり電話をかけてきたりするようになった。(6-8)
- 【86】父は最近、趣味で陶芸をやったり、母と旅行に行ったりと楽しんでいるように見える。(9-10)
- 【87】父は仕事一筋だったが、40を過ぎた頃から家族とふれあう機会を大切にするようになった。(9-10)
- 【88】父は50代後半になって「オレの時代は終わった」と言って仕事をやめた。今はおんがばかりしていた母と仲良く  
2人で暮らしている。不思議だ。(7-8)

<祖父母との関係>

- 【89】認知症の祖母に名まえを忘れてたとしてもそれを笑い話にしている父を見て、親子について考えさせられた。(10-11)
- 【90】祖母の葬式のときの父親の涙を忘れられない。(3-3)
- 【91】父や母は亡くなった祖父のことを「おじいちゃんかよたら〜だろうね」と口ぐせのように言う。だから、私も見  
習って、お盆には遠参りに行くように心がけている。(4-11)
- 【92】父は祖父と仲が悪く、話をするところを2回しか見たことがないが、祖父が亡くなったとき、父は一人で部屋に  
閉じこもって泣いていた。(5-8)

<父のように>

- 【93】環境の方が影響を持つと思うが、最近、父親に似てきたと感じることがある。(6-2)
- 【94】父は性格が違うと思っていたが、同じドラマの同じ場面で感動していたことを知って驚いた。(4-11)
- 【95】姉は兄弟姉妹の中で一番父に反発してけんかばかりしていたが、結局結婚した相手は父に考えが似ている。(4-11)
- 【96】子どもの頃は父親のようになりたいかったが、今は跡を継ごうとはしていない。(3-2)
- 【97】小さい頃は父のようになりたいと思っていた。いつの間にか、自分のやりたいことが見えてきて、そこから自分  
のために勉強するようになった。(9-8)
- 【98】昔は父親のような人間はなりたくないと思っていたが、今では理想像のようにになっている。(10-7)
- 【99】小さい頃は父の仕事を継ぎたいと思っていた。思春期の頃はそれだけ絶対的イヤだと思っていた。最近父の  
後を継いでいいかも思えるようになった。(10-9)
- 【100】父のようになりたいと思ったことはないが、父とは違った大人になりたいと感じることも、影響を受けていると  
いえる。(4-3)
- 【101】親戚に「顔は父さんの若い頃こそっくり」「性格は母さんゆずり」などと言われると、いゝ気がしない。(9-8)
- 【102】僕は父と反対の性格になった。姉は父と似ている。(10-3)

<父への距離感>

父とのかかわりをあまり好きではないとした上で、父子の認知のずれにふれているもの【103】がいた。

<父からの否定・叱責>

母の感情的に比較して父は「一言でびしっと怒る」ところ【104】に特徴を見出していた。

<父への嫌悪>



姉に嫌われながらも結婚式で涙する父を記すもの【105】がいた。

<父への批判>

父への批判は「子どもっぽさ」が多く【106~110】、その中でも「すねる」【108,109】が特徴としてあげられていた。また、中途半端なアドバイスにも批判的であった【111】。存在を否定しながら一緒に行動する父娘（姉）【112】には不思議な感じ、弟には優しいだけの父【113】にはさみしい気持ちを抱いていた。

<父への距離感>	
【103】	父のことがあまり好きではないが、その理由は父のことをあまり知らないからではないかと思った。(4-11)
<父からの否定・叱責>	
【104】	父は一言でびしと怒るが、母は感情的にずーっと怒る。(7S-11)
<父への嫌悪>	
【105】	姉は父を見ていてかわいそうながらも嫌っていた。それでも、姉の結婚式では父は立っていた。(4-11)
<父への批判>	
【106】	親が冤罪の邪魔をする。父が部屋を覗いて「遊んでよー」と言われたことがある。(8-4)
【107】	父は最近まで子どもだった。最近考えが不一致でも話で解決していく。親も子どもの成長に合わせて大人になっていくのかと思った。(10-7)
【108】	親子ゲンカをすると、父親がすねてかんしゃくを起こし、子どもが折れてたためる。(6-5)
【109】	父親を論理で負かしてはいけない。父親がすねるから。(7-3)
【110】	父の適当さと子どもっぽさ、楽観主義的な考えが嫌でたまらない。(7S-11)
【111】	両親の会話でもビデオのように途中で父親がアドバイスを与え、中途半端で終わる。(8-11)
【112】	姉は父に「シツで歩くな」「直シするな」とすごい勢いで命令し、父の存在を否定する。父は何も言及せず何を考えているのかわからない。それでも二人はドライブで行ったり楽しそうに酒を飲んだりしている。(10-7)
【113】	私は厳しく優しくった父が、歳の離れた弟は優しいだけになって、さみしい気持ちになった。(9-13)

Ⅲ 父親に対する記述と親・母親に対する記述の比較

思春期と青年期における父親に関する記述と母（または「親」）に関する記述を比較した。学生の感想から教員がフィードバック用に抽出したもののため、数を直接比較できないが、時期と父母の違いによる多少の傾向がみられるため参考としてまとめた。

父親を時期別にみると、青年期では思春期より、<父への尊敬><父の（中年期）変化><父と

表3 思春期・青年期における父と母（親）との比較

親	父		親・母		親	父		親・母	
	思春期	青年期	思春期	青年期		時期	思春期	青年期	思春期
親との関係の変化	2	—	2	1	親への距離感	8	1	9	5
親への好意・信頼	10	6	3	8	親からの自立	—	—	16	—
親への尊敬	—	7	2	7	親からの否定・叱責	4	1	5	—
見守る親	7	3	17	2	親への不満	—	—	11	—
先達としての親	8	4	4	3	親の干渉	—	—	5	2
人間としての親	3	3	3	2	親への遠慮	—	—	5	—
親の（中年期）変化	—	10	—	15	親への嫌悪	5	1	1	—
親の祖父母との関係	—	3	—	1	親との対立	4	—	17	—
親との類似	—	10	—	10	親への批判	—	8	—	—
					両親の関係	4	—	—	—

の類似><父への批判>に関する記述が多く、思春期では青年期より<父への好意・信頼><見守る父><先達としての父><父への距離感><父からの否定・叱責><父への嫌悪><父との対立>が多い。母親では青年期に<親への好意・信頼><親への尊敬><親の(中年期)変化><親との類似>が多く、思春期には<見守る親><親への距離感><親からの自立><親からの自立><親からの否定・叱責><親への不満><親の干渉><親への遠慮><親との対立>が多い。

時期別に父母を見ると、思春期では<親への好意・信頼><先達としての親>に関して父の方が多く、<親からの自立><親への不満><親の干渉><親への遠慮><親との対立>に関しては母の方が多い。また、青年期では<親への批判>が父に関して多く、<親への距離感>に関しては母の方が多かった。

## 考 察

### I 思春期における父親との体験

A 特別な存在から一人の人間へ：思春期以前における父親は自己存在感【3, 4】や安心感【5,10】を与え、遊び相手【6】や最強の人物【7】となる特別な存在であり、理不尽な叱責などはショックを与え【27】、「一人の人間」として見るようになるのは思春期に入ってからである【16,28,29】。また、「父親を超える」体験は喜びではなく「悲しい複雑」な気持ちをもたらす【1】。

B 見守りながら大切なきときは相談に乗りしっかりと叱責する：父親は「自分で決めろ」【26】と突き放し【15】、「背中を見せる」【21】、子どもの意志や気持ちを尊重する【12~14】、ふとしたときに大切に思う気持ちを感じさせる【17,18】など間接的に「見守る」存在であった。しかし、大切な相談には乗り【22~24】、悪いことをするとしっかりと叱責していた【40~42】。

C へだたりから嫌悪・対立へ：思春期になるとおねだり・反抗・競争ができない【32,37,38】、よそよそしい【31】関係になり、他人のふりをする【33,34】など距離感が生じる。また、娘は男女という性別を気にするようになる【35, 36】。「嫌いになったことがない」ものもいた【8,9】が、明確な嫌悪【44~47】や反抗・葛藤・対立【48~51】関係になったものもいた。

D 父母子の三者関係で母を支える：母とは異なる厳しい叱責【40~42】も特徴的だが、一部【41,42】は肯定的に評価されていた。母との三者関係において、父は「切る」【52】、「母にアドバイス」【53】、「母をコントロール」【54】、母をサポート【55,56】役割を担っていた。

E 思春期における父母の比較：単純な比較はできないが、父の方が好意と信頼、および助言に関する記述が特徴的で、母(親)にみられた自立の促進や不満、干渉、遠慮、対立などはみられず、先行研究と一致する結果が得られた。

### II 思春期以降(青年期)における父親との体験

F 尊敬と「父親のように」：思春期におけるへだたりや嫌悪・対立は減り、好意や肯定的な評価【57~62】が増える。家庭において敬意を表したり【63~65,69】仕事に対して敬意を表したり【66~68】した。特に仕事は思春期にみられないテーマであった。さらに、父親との類似性が多く記述されたがその変化の方向は多様である【93~102】。いずれも子どもが大人に近い青年期に入り、「一

人の人間・大人」としての父親を自分との関係において(White et al,1983)、しかも多少の距離(松平・三浦,2006;松井,2001)を取りながら体験している様子がみいだされた。

**G 見守り助言する存在**：思春期に引き続き、父は見守り【70～72】、必要なときには助言する存在【73～76】である。

**H 一人の人間として**：前述したように父を一人の人間としてみるようになる【77～79】が、そのあられとして父の中年期における変化とそれを肯定的にうけとめる(とめようとする)姿勢【80～88】、それに関連して父の祖父母との関係【89～92】が記されている。さらに、嫌悪・対立ではなく「批判」がされる【106～113】。特に、子どもっぽさ【106～109】が対象となっている。母(親)との比較においても父に対しては「批判」が多いことが顕著である。

**J 先行研究との比較とまとめ**：父性原理・母性原理(河合)に関して、父は「見守るが相談にのる」>個の成長と個人の責任を重視した言語的コミュニケーションを行っていた。<先達>として社会規範やルールを教え(平田,2003)、<叱責>のように厳格である(尾形,2010)と同時に、距離をとりながら相談・助言等をする(Schulman&Seiffge-Krenke,1997)道具的機能(Parsons&Bales,1955)と「やさしさにつながる協調性・民主性」(尾形,2010)がみられた。

**K 思春期における父親との体験の青年期におけるとらえ直し**：とらえ直しにはいくつかのパターンがみられた。

ア)思春期の体験をあとから振り返り「転機」とみなすもの【2,27,28,42】：例えば、親の財布からお金をとりこぼしどく怒鳴られた体験【42】により、ものごとの善悪を初めて理解できた」として

イ)思春期における感情や意味づけが変化するもの【15,31,75】：例えば、父の突き放したような態度に不安であった【15】が、今考えるとそれが自立を助けているように変化していた。

ウ)思春期の体験を現在(青年期)と関連づけて意味づけるもの【21】：父の背中を見たことと教師を目指すことを関連づけていた。

エ)受講により見方が変容したもの【37,47,51,53,77,100,103,107】：例えば、会社でまじめだが家でふざける父【77】を「バランスをとっている」と見るようになった。講義は答えを教えるのではなく、「見方・視点」を教え、学生は自分の体験と関連づけながら納得していくと考えられる。

以上のように、本研究から思春期と青年期の父親体験、その母(親)体験との異同、および青年期における思春期体験のとらえ直しの特徴が見出された。

#### 引用文献

福島朋子(1993)自立に関する概念的考察：青年・成人及び女性を中心として 発達研究：発達科学教育センター紀要, 9, 73-85.

Flouri, E&Buchanan, A (2003) The role of father involvement in children's later mental health. Journal of Adolescent, 26, 63-78.

平田裕美(2003)青年期前期の子どもに対する父親の関わり—分類と特性— 家族心理学研究, 17 (1), 35-54.

- 平山聡子(2001)中学生の精神的健康とその父親の家庭関与との関連 発達心理学研究, 12, 99-109.
- 細田絢・田嶋誠一(2009)中学生におけるソーシャルサポートと自他への肯定感に関する研究 教育心理学研究, 57, 209-323.
- 猪野郁子・堀江鈴子(1994)両親像について—大学生の捉える父親の現実像と理想像— 島根大学教育学部紀要(人文・社会科学), 28, 9-15.
- 鹿嶋達哉(2010a)講義「青年心理学」における大人—青年の世代間交流～講義内容・教員の語り、学生の感想とフィードバック、学生—教員の関係性の関連～ 広島国際大学教育論叢 創刊号 13-22.
- 鹿嶋達哉(2010b)思春期の問題行動に対する青年期のとらえ直し～教職志望学生の受講前後のいじめに対する見方の変容～ 広島国際大学教育論叢 第2号 3-13.
- 鹿嶋達哉(2013)思春期の問題行動に対する青年期のとらえ直し(2)～大学生の不登校に対する見方の受講による変容～広島国際大学教育論叢 第5号 17-28.
- 鹿嶋達哉(2014)思春期の問題行動に対する青年期のとらえ直し(3)～大学生の教師に対する見方とその受講による変容～広島国際大学教育論叢 第6号 17-28.
- 鹿嶋達哉(2015)思春期の問題行動に対する青年期のとらえ直し(4)～大学生の学びに対する見方とその受講による変容Ⅰ～広島国際大学教育論叢 第7号 24-34.
- 河合隼雄(1995)臨床教育学入門 岩波書店
- 鯨岡峻(2002)〈育てられる者〉から〈育てる者へ〉 日本放送出版協会
- 松平久美子・三浦香苗(2006)中学生の父親存在感認識と情緒的自律の発達との関連 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 9, 106-117.
- 松井洋(2001)日本の中学生の親子関係 川村学園女子大学研究紀要, 12(1), 171-180.
- 落合良行・佐藤有耕(1996)親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44, 11-22.
- 尾形和男(2010)父親の心理学 北大路書房
- Parsons, T. & Bales, R. F. (1955) Family socialization and the interaction process. New York: Free Press.
- Shulman, S. & Seiffge-Krenke, I. (1997) Father-adolescent relationships: Developmental and clinical perspectives. London: Routledge.
- 登張真穂・本田時雄・保坂亨(2007)大学生とその父母の父親像・母親像・子ども観 人間科学研究文科大学人間科学部, 29, 91-103.
- White, K.M., Speiman, J.C., & Cotons, D. (1983) Young adults and their parents: Individuation and mutuality. In H.D. Grotevant & C.R. Cooper (Eds.) Adolescent development in the family. San Francisco: Jossey-Bass Inc.